国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題

赤澤淳子
（心理学科）

本研究では国内のデートDVに関する研究をレビューし，その研究方法や結果を整理し，研究の問題点を検討した。これまでの研究の問題点として，調査対象者の偏り，比較文化研究の不足，暴力尺度の不統一，暴力の方向性や暴力生起メカニズムについての研究不足が見いだされた。これらの問題点をふまえ，国内におけるデートDV研究の今後の課題として，調査対象年齢を中学生から成人社会人まで広げ，虐待やいじめなど，デートDV以外の暴力との関連も視野に入れた暴力生起メカニズムの検討することがあげられる。
キーワード：デートDV，国内研究，レビュー

はじめに

内閣府（2013）によれば，ドメスティック・バイオレンス（domestic violence：DV）には明確な定義はないが，一般的には「配偶者や恋人など親密な関係にある，又はあった者から振るわれる暴力」という意味で使用されることが多いと説明されている。我が国でDVという用語が注目されるようになったのは，2001年に「配偶者からの暴力防止及び被害者の保護に関する法律」（以後，DV防止法）が制定され，夫婦関係における暴力がDVと定義されてからである。これを契機に，家庭内で生じる配偶者からの暴力が社会的な問題として認知されるようになった。しかし，近年では，配偶者間のDVとともに，青年期の恋愛における否定的な側面の１つとしてデートDVも問題視され始めるようになってきている。デートDVとは，青年期の恋愛関係にあるカップル間に生じる暴力のことである。冒頭の内閣府（2013）の説明ではデートDVもDVに含まれることになるが，ここでは配偶者間と恋人間のDVを区別するために前者を単に「DV」，後者を「デートDV」と呼ぶことにする。

DVとデートDVは婚姻関係があるかないかの違いがあるだけで，暴力をふるう理由や要因に違いはなく，両方とも社会が生み出している問題であるという点は共通している（山口，2003）。しかし，DV防止法の適用対象は現時点では同居する恋人までであり，同居していない恋人間でのデートDVは含まれていないという点において両者には違いがある。つまり，デートDVの場合，DVにおける一時保護のような措置は現在のところない。そして，デートDVはDVより概念としての定着も遅く，欧米に比すると国内の先行研究も少なく，その実態が見えにくい。

そこで本研究では，これまでのデートDVに関する国内の論文をレビューし，その研究方法と結果を整理するとともに，そこから見える問題点を検討した上で，デートDV研究の今後の課題について考察したい。

１．　DVおよびデートDV研究の国内外における研究の流れ

米国では，女性解放運動の成長と並行して，1970年代後半に，夫からの常習的暴力（バタリング）により，心身がぼろぼろになった妻（被虐待女性＝バタードウーマン）の存在がWaker（1979）によって明らかにされた。Wakerは，夫によって暴力を振るわれた妻の面接を行い，その内容から暴力のサイクルというDVのメカニズムを明らかにした。当時は，DVに関する報告の多くは書籍であり，心理学の雑誌論文はほとんどなかったが，これらのDV被害女性の研究に導かれる形で1980年代以降デートDVに関する調査研究も盛んに行われるようになっている（Frieze, 2008）。ちなみにPsycINFOにおいて「dating」「violence」の2語でAND検索すると，論文数は17,896件で，そのうちタイトルに「dating violence」を含む論文は697件である（2016年1月5日現在）。欧米[1]では，「暴力」という用語は「violence」に加え「aggression」や「abuse」という語もしばしば用いられているので，それらをviolenceのOR検索語に含めると，さらに論文数は多くなるであろう。一方，国内では，1997年に上述したWakerの書籍が邦訳され，また，2001年にはDV防止法が制定されたこともあり，2000年以降からDVに関する書籍が出版されている（小西, 2001;　中村, 2001など）。また，同時期に山口（2003）が親密な関係にある若者間の暴力を「デートDV」と呼び，デートDV防止プログラムを作成している。国内のデートDV研究について，CiNiiにより「dating violence」「デートDV」「デートバイオレンス（ディティングDVを含む）」というキーワードで各々検索したところ，重複や学会発表を除外すると，134件であった（2016年1月5日現在）。

Figure 1に年代別に欧米（697件）と国内（134件）で発行されたデートDVの論文件数を発行年代別示した（Figure1）。欧米では2000年以降，デートDVに関する論文が急増したことがわかる。また，国内においても欧米に遅れること20年ほど経た2000年頃から，DVやデートDVの調査研究が行われるようになったようである。現在，国内においてデートDV研究に着手されるようになって10年以上経過しているが, 総論文数は欧米のここ5年間の論文数にも達していない。

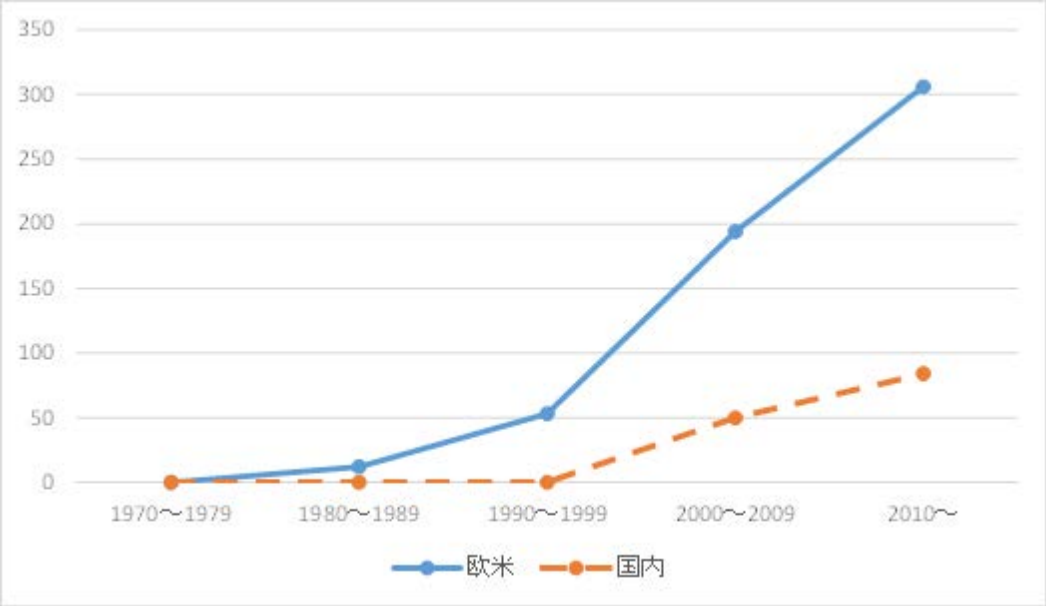

Figure 1．年代別にみた国内外におけるデート DV 論文数
（PsycINFO および CiNii より著者が作成）（2016 年 1 月 5 日現在）

２．国内における DV 調査研究は何を明らかにしたか

国内のデート DV に関して 2014 年 11 月までに発表された 119 論文を調べ，その内容を Figure 2 に示した項目で分類した。最も多かったのは「啓発，性教育，防止教育」に関する論文で 58 件（49%），次いで多かったのは調査研究の中の「実態把握と規定要因に関する調査研究」論文で 44 件（37%），「臨床・介入研究」論文が 5 件（4%），「レビュー・展望など」と「海外のデート DV 実態」に関する論文が各 3 件（2.5%），「測定尺度の作成」，「予防教育の効果検証」，「その他」が各 2 件（1.7%）であった。「実態把握と規定要因に関する調査研究」論文 44 件のうち 2009 年までに発表された調査研究論文は 13 件で，2010 年以降が 31 件と倍以上増えており，デート DV に関する調査研究が増えているといえる。しかし，全体としてデート DV の論文内容は実態把握に関するものが多く，予防教育の効果検証や尺度構成に関する論文などは各々2 件しかない。

以下に，「実態把握と規定要因に関する調査研究」論文 44 件の内容について，（1）調査対象者および調査国，（2）デート DV の測定に使用された尺度あるいは暴力の内容，（3）分析内容と結果について概観する。

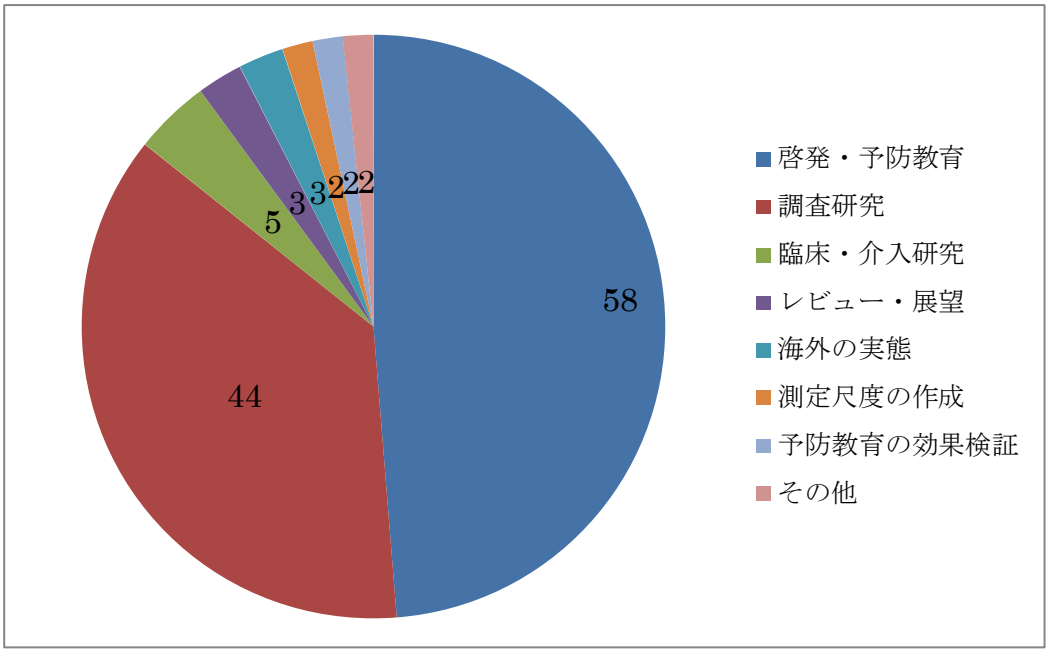

Figure 2.　2014 年 11 月までに発表された国内におけるデート DV に関する論文数

(1) 調査対象者および調査国

調査対象者については約 80%が大学生・短期大学生・専門学校生を対象としたものであった（Table 1）。調査対象国は 97.7%が日本であり，他国との比較文化研究は森永・Frieze・Li.・青野・周・葛西（2011b）の米国および台湾の大学生と日本の大学生を比較した 1 論文のみであった。

(2)　デート DV 暴力の測定に使用された尺度や暴力の内容

暴力観および暴力の被害・加害経験の測定では，Sugihara et al.（2003），森永・Frieze・青野・葛西・Li（2011a）および森永ら（2011b）の 3 つの論文において Straus（1979）による葛藤方略尺度（The Conflict Tactics Scales: CTS）19 項目が用いられていた。CTS は「(身体的）暴力（violence)」「言語的攻撃（verbal aggression)」「話し合い（reasoning)」の 3 つの下位尺度から構成されており，過去 1 年間の葛藤方略の回数について 8 段階で評価している。CTS は米国やその他の国において，親密なパートナー間の暴力の測定に広く用いられている尺度である。CTS の開発により DV およびデート DV に関する調査研究は飛躍的に増加したが，いくつかの批判を受け，改訂版の CTS2（The Conflict Tactics Scale Revised:

CTS2）（Straus, Hamby, Boney-McCoy, & Sugarman, 1996）が作成された。CTS2 は，「交渉（negotiation）」「心理的攻撃（psychological aggression）」「身体的暴行（physical assault）」

Table 1．デート DV に関する 44 件の調査研究論文（Figure 2）の調査対象者，調査国，使用尺度の内訳

内　　容	論文件数（%）
調査対象者の属性	
中学生のみ	1 (2.3)
高校生のみ	5(11.4)
大学生・短期大学生・専門学校生等	34（77.3）
中学生・高校生	1（2.3）
中学生・高校生・大学生	1（2.3）
教員	1（2.3）
その他	1（2.3）
調査国	
日本のみ	43（97.7）
日本・台湾・米国	1（2.3）
使用尺度	
CTS,CTS2	4（6.8）
その他の尺度（PMI，VAWS，ISA）	2（4.5）
その他	39（11.3）

「性的強要（sexual coercion）」「傷害（injury）」という 5 つの下位尺度から構成されている。CTS2 では単に暴力の頻度を問うだけでなく，「傷害」という下位尺度において，身体的かつ性的暴力の被害の程度も測定できる項目を設けている。榊原（2011）では，CTS2 を一部修正し，身体的暴力 12 項目と傷害 1 項目が用いられている。

その他の尺度として，榊原（2011）では，精神的暴力を測定するための Kasian & Painter（1992）による PMI（The Psychological Maltreatment Inventory）33 項目が用いられている。PMI は，「支配／おどし」「中傷」「制限」「敵意的ひきこもり」等の項目から構成されている。また，市川ら（2012）では，片岡（2005）による「女性に対する暴力スクリーニング尺度」（VAWS：Violence Against Women Screen）を修正し，8 項目が用いられていた。この尺度は身体的暴力，精神的暴力，および性的暴力項目から構成されている。さらに，上杉ら（2013）では，Hudson & Mclntosh（1981）による ISA（lndex of Spouse Abuse）を

日本語に翻訳した片岡ら（2005）による日本語版 ISA（lndex of Spouse Abuse）30 項目が用いられていた。ISA は「身体的暴力」と「非身体的暴力」から構成されている。

上記の論文以外の多くの論文では，暴力項目を先行調査や研究を参考に作成したり，自由記述や予備調査等から抽出したりするなど，その研究固有の尺度を使用していた。暴力の内容をみると，ほとんどの論文が調査項目として「身体的暴力」，「精神的暴力」，「性的暴力」を含んでいるが，その内容は論文によって異なっており，精神的暴力において特に論文間の項目の差異が顕著であった。

(3) 分析内容と結果

44 件の論文の分析内容は，①暴力観（デート DV 認知度，認識度，容認度など），②デート DV 被害・加害経験の実態，③デート DV 被害・加害の関連要因の 3 項目に大きく分けることができる。以下に，それらの研究結果を項目ごとに整理する。

① 暴力観

44 件中 16 件（37.2%）が暴力観について調査していた。「身体的暴力」に関して，どの論文も調査対象者の 7～9 割以上の者が身体的暴力を暴力として認識している（e.g., 李・塚本, 2005 ; 艮・小堀，2013）。しかし，軽微な暴力になると暴力への認識は曖昧になり，「軽く叩く程度なら，特に問題はない」という回答した調査対象者は 80.2%という報告もあった（藤原・吉岡，2014）。また，暴力観における性差に関しては統計的な手法を用いて性差が検討されている論文が 8 件あり，その結果は性差がみられない論文（e.g., 松野・秋山，2009），女性の認識が男性より高い論文（e.g., 武田・大西，2012），逆に男性の認識が女性より高い論文（e.g., 原ら, 2012）など，一貫した結果は得られていない。

性的暴力についても，身体的暴力と同様に暴力としての認識は高く，各論文とも調査対象者の 7～9 割が性的暴力を暴力と認識している（e.g., 李・塚本，2005 ; 武田・大西，2012）。また，性的暴力については明確な性差が示されており，女性は男性より暴力行為として捉えている論文が多い（e.g., 松野・秋山，2009 ; 富安・鈴井，2011）。しかし，中高生を対象とした井ノ崎・野坂（2010a）では，「無理やりキスしたり，抱きしめる」という項目において，女性は男性より暴力容認度が高いと報告しており，性的暴力においても暴力の内容や年齢によって意識に違いがあることが示されている。

精神的暴力においては，その内容が多岐にわたるため，内容によって暴力観は大きく異なる。例えば「殴るふりをして脅す」という脅迫行為は暴力としての認識度が高く，調査対象者の約 70%から 80%が暴力に当たるとしており（e.g., 中岡・寺橋, 2009 ; 艮・小堀, 2013），身体的暴力や性的暴力にも匹敵する。ところが，「大声で怒鳴る」に対しては，長安（2005）の高校生を対象とした調査では，男女ともに対象者の 86%が暴力であるとしているが，李・

塚本（2005）の大学生を対象とした調査では，「暴力の場合も，そうでない場合もある」とする者が対象者の 57.6%になり，暴力であるという認識が低下する。さらに，「無視する」や「携帯のチェック」などは調査対象者の半数が暴力と認識していないという結果もある（e.g., 李・塚本，2005）。以上のように，精神的暴力における暴力観は暴力の内容によってかなり認識が異なり，さらに暴力観における性差も調査によって研究によってばらつきがあり一貫していない。

② デート DV 被害・加害経験の実態

44 件中 34 件において，被害・加害の実態が検討されていた。被害率を示した論文をみると，中学生では調査対象者の 20%弱が（小澤・長谷川，2013），高校生では調査対象者の 10%から 50%が被害を経験していた（e.g., 植田・安東，2010；山田・山田，2010）。大学生を対象とした調査では，調査対象者に交際経験がない者を含む場合もあり，被害率は 12.8%からほぼ 100%までの幅があり，調査による差が大きい。内閣府（2014）の「男女間における暴力に関する調査」によると，10 歳代から 20 歳代の頃に交際相手から身体的暴行を受けた者は 6.0%，心理的攻撃は 8.2%，性的強要は 3.8%となっている。本研究で取り上げた論文における被害率は，内閣府の調査結果の率より高いものがほとんどである。なお，精神的暴力の被害率は身体的暴力や性的暴力より高くなっている点については，多くの論文で一致した結果が得られている。

次に，加害経験については，中学生では加害率が調査対象者の 10%以下となっており（小澤・長谷川，2013），高校生では調査対象者の 10%から 50%であった（e.g., 植田・安東，2010；山田・山田，2010）。大学生では調査対象者の 10%前後から 70%強までの範囲に分布しており，調査によってかなり数値が異なる。被害経験と同様に，加害経験においても精神的暴力の加害率は身体的暴力や性的暴力より高くなっている。

被害経験あるいは加害経験の性差について統計的に検定されている論文は 14 件だった。身体的暴力および精神的暴力の被害経験率においては，性差は一貫していない。性的暴力被害は 12 件中 5 件で女性の被害が有意に高く（e.g., 小泉・吉武，2008；西村，2013），男性の被害率が高い論文は 0 件だった。加害経験率においても，身体的暴力および精神的暴力については，性差は一貫していない。しかし，性的暴力加害では性差が顕著で，13 件中 9 件において男性の加害率が有意に高く（e.g., 李・塚本，2005；松野・秋山，2009），女性の加害率が高い論文は 0 件だった。

③ デート DV 被害・加害の関連要因

デートDVの被害・加害率に関連する要因として，①被害者や加害者のパーソナリティー特性や性役割観（ジェンダー観）といった個人変数，②恋愛関係にある当事者間の親密性や関係性などの関係変数，③学校や家庭という当事者をとりまく社会文化的背景が取り上げられている。なお，これらの変数は，必ずしもデートDV被害・加害との直接的な関連要因として取り上げられているわけではなく，間接的な要因として分析されている場合もある。

まず，個人変数としては，暴力観，性役割観，自己評価，攻撃性などが検討されている。その中でも比較的多く検討されているのは，性役割観と自己評価である。性役割観を変数として導入している論文15件のうち6件において性役割観が伝統的であるほど，加害・被害経験の両方，あるいはどちらかが多いという結果が示されている（e.g., 李・塚本， 2005；吉岡，2007）。しかし，関連が示されていない論文や（e.g., 鈴木ら，2009），性役割観の内容によっては，伝統的であるほど暴力を行使しないという結果も示されている（西村，2014）。次に，自尊心や自己評価が導入されている研究は7件で，そのうち3件で被害者や加害者の自尊心や自己評価の低さが示されているが（e.g., 西岡・小牧，2008；川端，2011），3件では関連が示されていない（e.g., 森永ら，2011；上杉ら，2013）。また，言語的攻撃と自己評価との間に正の相関がみられている場合もある（e.g., 藤田・米澤，2009）。以上のように，性役割観や自己評価等の個人変数については，関連するとされる論文もあるが，研究結果は一貫していない。

当事者間の関係を変数として導入している論文は11件であり，取り上げられている変数の内容は共依存，恋人との関係性，恋愛満足度，熱愛度，恋愛意識，衡平，社会的勢力など，多種多様である。恋人との関係満足度が取り上げられている論文3件のうち2件において関係満足度の高さとデートDVとの関連が指摘されており，被害・加害経験者の満足度は低いことが示されている（西岡・小牧，2008；上野ら，2011）。また，共依存の高さ（野口，2009），束縛の高さ（西岡・小牧，2009），独占欲など激しい恋愛意識としてのManiaの高さ（赤澤ら，2011）など，当事者の関係への過剰なのめり込みがデートDVの被害や加害と関連していることが明らかになっている。さらに，当事者間の不均衡な関係性や両者の勢力の差も（赤澤ら，2011；岡本，2013）など，二者関におけるバランスの悪さがデートDV被害・加害に関連していることが示唆されている。

学校に関わる要因として取り上げられているのは「いじめ」であり，論文数は3件であった。Sugihara et al.（2003）の大学生を対象とした調査では，いじめを行っていた者は，恋愛関係においても心理的・身体的暴力を行使したことがあることが示され，いじめの加害とデートDV加害との関連が明らかとなっている。また，井ノ崎・野坂（2010b）の大学生を対象とした調査では，いじめの中で性行為の強要以外の全ての加害行為において，経験者の方が無経験者よりも攻撃性が高いという結果が示されている。さらに，中高生を対象とした井ノ

崎・野坂（2010a）では，いじめ加害のどの行為においても，何らかのデート DV 被害経験と関連があり，その内容が類似していることから，被害を受けた者が，その後加害を行うという暴力の連鎖によってデート DV が生じている可能性が示唆された。

家族要因が取り上げられているのは 9 件であり，DV 加害・被害経験の高さと関連する要因として，家族への否定的感情（e.g. 藤田・米澤，2009），親の養育態度や親子関係（e.g.，松並ら，2012），親からの虐待（e.g., Sugihara et al.，2009），両親間での喧嘩や暴力行為の目撃（e.g.，森永ら，2011a）や愛着（井ノ崎ら，2012）が検討されている。

こうした家庭内での児童虐待や DV の目撃，学校でのいじめ，デート DV，DV についての関連についての一連の研究は，異なる暴力間に互いに関連性があることを示唆している。

３．国内におけるデート DV 研究の問題点

本節では，国内におけるデート DV に関する研究の問題点について論じる。

(1)調査対象者および調査国の偏り

まず，これまでの国内のデート DV 研究における調査対象者は，ほとんどが大学生，短期大学生，および専門学校生である。大学生という時期においては，親密な二者間の交際が活発化する時期でもあることから, デート DV の生起率も高くなるといえるであろう。しかし，デート DV はより早い時期から起こることが考えられる。「青少年の性行動全国調査第 7 回」の結果を分析した片瀬（2013）によれば，2011 年のデート経験率は，中学生ですでに 20%前後あり，高校生男女は 50%を超え，大学生で 80%弱に達している。また，同研究によれば, 中学生段階での性交渉経験率は男女ともに 1987 年以降 2011 年までほぼ横ばいの 2～4%であり，中学生でも経験者が少数ながらいることが示されている。成長に伴って親密な二者間の交際が多くなるとしても，親密な交際をする中学生においてデート DV は既に生起していると考えてよいであろう。さらに，上記で概観したようにデート DV に関連するとみなされるいじめや家族要因は大学生よりむしろ中学生のほうが多いことが想像される。このような状況を鑑みれば，デート DV に関する若年層の調査研究が必要であると考えられる。

しかし，実際に中学生・高校生を対象に調査研究を実施するには大きなハードルがある。デート DV という問題は，性的な内容が含まれているため，中学生や高校生に調査を実施する場合には, 学校や保護者の理解が得られなければ難しい。実際, 今回調べた論文の中にも，高校生を対象とした長安（2005）は「調査協力校を探すこと自体が困難だった」，山田・山田（2010）は「学校側および PTA 役員などの意見により最低限の内容で共通して聴取できる項目に絞られたため，交際経験，性交経験については質問していない」と記述している。しかしながら，デート DV については，早期からの介入が必要であるという立場から考える

と実態の把握は急務である。そのための調査研究は十全な倫理的配慮を行い，対象機関に十分な理解と協力を求める努力が必要とされることは言うまでもない。

今回調べた論文にデートDVに関する他国との比較文化研究が1件あった(森永ら, 2011b)。青野（2010）は，DVにおいては男性から女性への暴力が圧倒的に多く，その背景には男性優位の社会や性役割規範の強い社会があると指摘している。つまり，親密な二者関係における暴力は個人的な問題だけでなく，文化・社会的問題だといえる。社会や文化のありようがデートDVの生起に及ぼす影響について明らかにするためには，国内研究だけでなく異文化との比較研究が必要だと考えられる。しかし，現状ではほとんど着手されていないようである。

(2) デートDVにおける暴力測定尺度について

尺度の課題として，調査によって全体の質問項目数や，暴力の種類毎の項目数にばらつきがあるという点が挙げられる。これが，暴力観やデートDV被害・加害の実態の結果における一貫性の無さに影響している可能性がある。欧米では妥当性・信頼性が確認されたCTSやCTS2が親密な対人関係における暴力を捉えうる尺度として有用かつ頻用されている（Smith Slep & O'Leary, 2005；Frieze, 2008）。CTSは1972年以降多くの研究で使用され，少なくとも20カ国以上で用いられているが（Straus et al., 1996），我が国においては，CTSやCTS2を使用した研究は少なく，これに代わるような有用性の高い尺度は管見の限り開発されていない。先述したように比較文化研究を行う上でも，共通の物差しを使用するメリットは高いと考えられる。

次に問題点として挙げられるのは，測定尺度での頻度の問い方である。国内外を問わず，多くの尺度において，暴力の測定に用いられているのは頻度であるが，その問い方が研究によってかなり異なっている。CTSのように過去1年間の暴力の被害・加害の回数を尋ねているものもあれば，「時々」や「まれに」のような順序尺度が用いられている場合もある。また，暴力を受けた期間を特定していないものもある。Marshall & Rose（1987）が指摘しているように，暴力経験者は6ヶ月ごとにたたかれることを「まれ」と考え，経験したことがない人は，それを「時々」と考えるかもしれない。また，過去10年間に様々な恋人から10回の暴力を受けた者と，過去1週間に同じ恋人から10回の暴力を振るわれた者との，10回の暴力を等価としても良いのだろうか。こられの点についても再考する必要があるだろう。

さらに，尺度の問題点として，前述したようにデートDVの被害・加害の実態を測定している尺度の多くが頻度のみを用いているという点が挙げられる。つまり，Brush（1990）が指摘するように，暴力の行動に焦点が当てられており，その意味や影響については測定されていないのである。これらの批判を受けてCTS2には傷害の程度に関する項目が含まれている

が，これらの項目はあくまでも身体的暴力や性的暴力を受けたときの怪我の程度など，身体的なダメージを測定するものである。つまり，暴力を受けたときに被る精神的な影響について検討されているものは皆無である。しかし，同じ頻度であっても，男性が女性に対して身体的暴力を与える場合と女性が男性に身体的暴力を与える場合とでは，受ける側のダメージには差が示される可能性がある（赤澤・竹内, 2015; Frieze & Davis, 2000）ことを考えると，今後は頻度だけでなく，暴力を受けた結果として被る心身の被害の程度を測定する尺度を作成し，頻度と併せて分析する必要があるだろう。

(3）暴力の方向性の検討について

親密な二者関係の研究では，これまで異性愛を前提として研究されてきたこともあり，男女差に注目されることが多く，デートDVもその例にもれない。また，DV研究が，夫によって虐待される妻の面接調査からでスタートしたということもあり，DVでは被害者は女性で，加害者が男性という構図が一般的とされてきたこともそれに拍車をかけている。

しかし，今回，国内のデートDVの調査研究を概観したところ，被害・加害における性差については，性的加害以外では一貫した結果が得られていなかった。このことは男性も女性も，被害者にも加害者にもなり得ることを示しているということではないだろうか。ところが，国内の調査研究では，実際には，被害者でもあり，加害者でもある者が含まれているにもかかわらず，被害と加害を別々に分析している。その際，多くの調査では，異性愛者か同性愛者かについて尋ねられていないにもかかわらず，異性愛者という前提で性差が検討されている。海外の研究では，既に暴力の多様な方向性を視野に入れ検討がすすめられているが（e.g. Johnson & Ferraro, 2000；White, 2009），国内では唯一，西岡・小牧（2009）において，被害と加害の経験率がどちらも高い者を抽出して，その他の者との比較を行っていただけである。

（4）暴力生起メカニズムの検討

これまで暴力の生起要因として，個人変数，当事者間の関係変数，社会文化的背景との関連が個々には検討されている。しかし，これらの要因間の関係を明らかにする研究はまだ数少ない。上述したように，家族関係や家族内の暴力とデートDV加害との関連が示されている。これらの一連の研究結果を時系列にみると, 児童虐待やDVの目撃, いじめ, デートDV, DVという暴力が連鎖しているようにもみえる。このような暴力の連鎖についても欧米では既に実証研究が行われている。例えばNarayan et al.（2014）では，幼児期（0～64ヶ月）の家庭内暴力への暴露は16歳時の親友との葛藤や23歳時のデートDV加害の予測要因となっていることが明らかとなっている。また，欧米では，このような家庭内での暴力経験が自身

の暴力経験を生みだすメカニズムを説明する理論として，葛藤解決の方法として暴力の学習（e.g., Worth et al., 1990），愛着の安全基地が攻撃されることによるトラウマ（Dutton, 2008），などから説明されている。しかし，国内のデート DV 研究では，児童虐待や DV の目撃，いじめ，デート DV，DV という暴力間の関連性を生涯発達的視点からみた暴力生起メカニズムの検討はまだ行われていない。

４．国内のデート DV 研究における今後の課題

国内におけるデート DV 研究を概観し，そこからいくつかの問題点を示した。これらの問題点をふまえ，今後のデート DV 研究の課題について考察したい。

まず，調査対象者の幅を中学生，高校生，大学生，および社会人に広げ検討することにより，デート DV の年齢による変化を捉える必要性があるだろう。これまでの国内研究において，中学生，高校生，大学生を全て調査対象者に含んでいるのは小澤・長谷川（2013）のみであり，これも横断的研究である。そこでは，中学生のデート DV の認知度が高校生や大学生より低く，威圧的な暴力の加害経験は高いという結果が示されている。この研究結果は，中学生時期からのデート DV 予防教育や介入の必要性への示唆を与えるものとなっている。今後は，各暴力の被害・加害が年齢とともにどのように変化し，その変化は発達期の若者の親密性の構築にいかなる影響を与えるのかという点について検討する必要性がある。

次に，デート DV 被害・加害の実態を測定する際に用いる尺度についても検討する必要があるだろう。現時点では研究者が各々固有の尺度を作成し使用しているため，結果にも一貫性がなく，国際比較も行いにくい。そのため，今後は，項目や頻度の統一が必要である。尺度の暴力の項目については，が指摘するように，内容が異なる暴力とされる言動を整理し，種々の暴力を網羅し（上野，2014），多種多様な内容を含む精神的暴力を分類する必要性がある。また，暴力頻度だけでなく，暴力を被ることによる結果としての心身への影響の大きさも考慮に入れる必要があるだろう。今後，このような視点を尺度に導入することにより，身体的暴力や性的暴力という被害が目に見えやすい暴力の影響だけでなく，目に見えにくい精神的暴力の精神的ダメージも明らかにすることが可能となるだろう。また，このダメージの違いこそが，男女差に加えて，関係の中での加害者と被害者を分ける指標となり得る可能性もある。

そして，データを分析する際には，暴力の双方向性に注意を払う必要がある。デート DV においては，双方向的な暴力が生起している可能性は高い。被害者にもなり，加害者にもなりうるという構図はいじめにおいても共通するものがある。つまり，「被害者」「加害者」というように簡単に区別できるものではなく，DV やいじめのように歪んだ対人関係において両者は容易に反転しやすい（本間，2008）。よって，DV やいじめなどの親密な対人関係に

おける暴力では被害者と加害者とを分断するのではなく，暴力の相互性に着目し，関係全体あるいは関係そのものを扱っていくことが重要だといえる（e.g., Frieze, 2005; 鈴木, 2008 など)。

さらに，今後は，暴力をマクロな視点から検討する必要性がある。つまり，デート DV をその一部に含む，暴力間の関連メカニズムを明らかにする試みである。デート DV の実態把握もさることながら，予防や介入という視点からすると暴力の生起メカニズムを明らかにする必要性は大きい。これまで，親から子への暴力は児童虐待として，子から親への暴力は家庭内暴力として，未婚者カップル間の暴力はデート DV として，さらに夫婦間の暴力は DV として個々に研究が積み重ねられてきた。最近では，児童虐待とデート DV，いじめとデート DV との関連など，いくつかの暴力間の関係性も検討されてきつつある。今後は暴力がどのようなプロセスで連鎖していくのかについて検討する必要性がある。その際，暴力の学習理論や愛着理論を導入し，それらの有効性についても検証する必要があろう。

最後に，今回デート DV に関する国内研究を概観した結果，啓発・予防教育や実態把握の調査研究は多かったが，予防教育の効果検証に関わる論文は 2 件しかなかった。しかも，それらの研究は，意識面の変化における効果の検討に留まっている。海外では，予防教育の行動面での効果検証も行われており，予防教育の 2 年半後に，教育を受けた男子は受けていない男子よりコンドームの使用が増えており，安全な性行為が報告されている（Wolfe et al., 2009)。国内においても，デート DV の被害・加害における意識面のみならず，行動面での変容を促すような予防教育のあり方や効果検証に関する研究が望まれる。

注

1　検索した論文は，ほとんどが英語の論文であり，欧米の研究が多いとみなされるので，本研究では欧米の研究として扱う。

引用・参考文献

青野篤子 (2010). ドメスティック・バイオレンス（DV）とその背景　柏木惠子編著　よくわかる家族心理学　ミネルヴァ書房　pp. 180-183.

赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子　(2011). 衡平性の認知とデート DV との関連　仁愛大学研究紀要　人間学部篇, **10**, 11-23.

赤澤淳子・竹内友里 (2015). デート DV における暴力の構造について－頻度とダメージとの観点から　福山大学人間文化学部紀要, **15**, 51-72.

Brush,L.D. (1990). Violent acts and injurious outcomes in married couples: Methodological issues in the National Survey of Families and Households. *Gender*

and Society, **4**, 56-67.

Dutton, D.G. (2008). My back pages: Reflections on thirty years of domestic violence research. *Trauma, Violence, Abuse*, **9**, 131-143.

Frieze, I.H. (2005). *Hurting the one you love: Violence in relationships*. Pacific Grove, CA: Thompson/Wadworth.

Frieze, I.H. (2008). Social policy, feminism, and research on violence in close relationships. *Journal of Social Issues*, **64**, 665-684.

Frieze, I. H., & Davis, K. (2000). Introduction to stalking and obsessive behaviors in everyday life: Assessments of victims and perpetrators. *Violence and Victims*, **15**, 3–5.

藤田絵里子・米澤好史 (2009). デートＤＶに影響を及ぼす諸要因の分析とＤＶ被害認識の明確化による支援の試み　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, **19**, 9-18.

藤原美智子・吉岡伸一 (2014). 青年期における親密な関係の若者間の暴力被害に関連する要因について　米子医学雑誌, **65**, 37, 48.

原健一・永松美雪・中河亜季・齋藤ひさ子 (2012). 中学生男女の親・教員との会話と男女交際および性感染症に関する知識・意識・行動との関連　思春期学, **30**, 223-234.

畑下博世・上間美穂・但馬直子・菱田知代・鈴木ひとみ・辻岡芳美 (2005). 特別記事“デート DV”文献レビュー　保健師ジャーナル, **61**, 1077-1083.

Hudson, W.W. & Mclntosh, S.R. (1981). The assessment of spouse abuse: Two quantifiable dimensions. *Journal of Marriage and Family,* **43**, 873-888.

井ノ崎敦子・野坂祐子 (2010a). 中高生のいじめ及びデートＤＶの加害経験に関する研究　日本＝性研究会議会報, **22**, 40-51.

井ノ崎敦子・野坂祐子 (2010b). 大学生における加害行為と攻撃性との関連　学校危機とメンタルケア, **2**, 73-85.

井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子・赤澤淳子 (2012). 大学生におけるデートＤＶ加害および被害経験と愛着との関連　学校危機とメンタルケア, **4**, 49-64

市川裕理・石田貞代・萩原結花 (2012). 青年期男女のデートＤＶに関する意識　山梨県母性衛生学会誌, **11**, 1-8.

Johnson, M.P. & Ferraro, K.J. (2000). Research on domestic violence in the 1990s: Making distinctions. *Journal of Marriage and the Family*, **62**, 948-963.

Kasian, M. & Painter, S. (1992). Frequency and severity of psychological abuse in dating population. *Journal of Interpersonal Violence*, **7**, 350-364

片岡弥恵子 (2005). 女性に対する暴力スクリーニング尺度の開発　日本看護科学会

誌, **25**, 51-60.
片岡弥恵子・八重ゆかり・江藤宏美・堀内成子 (2005). 妊娠期におけるドメスティック・バイオレンス　日本公衛誌, **52**, 785-793.
片瀬一男 (2013). 第 7 回「青少年の性行動全国調査」の概要　財団法人日本児童教育振興財団内　日本性教育協会（編), 「若者の性」白書：第 7 回　青少年の性行動全国調査報告 (pp. 9-24）.東京：小学館.
川端多津子　(2011). 学生の「デート DV」と自尊感情を考える　セクシュアリティ, **52**, 52-59
小泉奈央・吉武久美子 (2008). 青年期男女におけるデート DV に関する認識についての調査　純心現代福祉研究, **12**, 61-75.
小西聖子 (2001). ドメスティック・バイオレンス　白水社
李璟媛・塚本宜子 (2005). ディティング DV に関する研究　宮崎大学教育文化学部教育実践研究紀要, **13**, 1-18.
Marshall, L.L. & Rose P. (1987). Gender, stress and violence in the adult relationships of a sample of college students. *Journal of Social and Personal Relationships*, **4**, 299-316.
松田悠史 (2008).デートＤＶ加害者の認識と実態　看護教育, **49**, 718-722
松並知子・青野篤子・赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子 (2012). デートＤＶの実態と心理的要因：自己愛との関連を中心に　女性学評論, **26**, 43-65.
松野真・秋山胖 (2009). 若年層における特定異性間の暴力に関する研究生活科学研究, **31**, 117-128.
森永康子・Frieze, I.H.・青野篤子・葛西真記子・Li, M. (2011a). 男女大学生の親密な関係における暴力　女性学評論, **25**, 219-236.
森永康子・Frieze,I,H.・Li, M.・青野篤子・周玉慧・葛西真記子 (2011b). Dating violence of college students in Japan, Taiwan, and the United States: A cross-cultural comparison. 神戸女学院論集, **58**, 101-111.
永松美雪・原健一・中河亜季・中野理佳 (2012). 性行動に伴う危険を予防するプログラムの効果.思春期学, **30**, 365-376.
長安めぐみ (2005). 高校生意識調査にみるデート DV の現状と課題　セクシュアリティ, **19**, 102-110.
内閣府 (2012). 男女間における暴力に関する調査
（http://www.gender.go.jp/e-vaw/chousa/images/pdf/h26danjokan-6.pdf）（2016 年 1 月 2 日）

内閣府 (2013). 配偶者からの暴力被害支援情報（http://www.gender.go.jp/e-vaw/dv/index.html）（2015 年 12 月 22 日）
中村正 (2001). ドメスティック・バイオレンスと家族の病理　作品社
中岡泰子・寺橋侑希 (2009).女子大学生のデートＤＶに関する調査研究　四国大学紀要, **32**, 83-91.
Narayan, A.J., Englund, M.M., Carlson, E.A., & Egeland, B. (2014). Adolescent conflict as a developmental process in the prospective pathway from exposure to interparental violence to dating violence. *Journal of Abnormal Child Psychology*, **42**, 239-250.
西村愛里 (2013). 大学生のデートＤＶの実態 (1)－沖縄大学大学生へのアンケート調査における被害・加害の実態－　地域研究, **12**, 57-73.
西村愛里 (2014). 大学生のデートＤＶの実態(2)－沖縄大学大学生へのアンケート調査におけるデート DV の背景要因－　地域研究, **13**, 167-177.
西村香・森田展彰 (2013). 大学生における支配的恋愛関係チェックリストの作成，および信頼性，妥当性の検討 :「束縛」に焦点化した dating violence 調査票　アディクションと家族：日本嗜癖行動学会誌, **29**, 244-253.
西岡敦子・小牧一裕 (2008). 「リプロダクティブ・ヘルツ/ライフ」に関する調査Ⅷ　国際研究論叢：大阪国際大学紀要, **21**, 36-53.
西岡敦子・小牧一裕 (2009). 「リプロダクティヴ・ヘルツ/ライツ」に関する調査Ⅷ第 2 報　国際研究論叢：大阪国際大学紀要, **22**, 25-39.
野口康彦 (2009). 大学生カップル間におけるデートＤＶと共依存に関する一検討　山梨英和大学紀要, **8**, 105-113.
野坂祐子 (2011). 高校生の性問題行動に対する教員の認識に関する一考察　学校危機とメンタルケア, **3**, 76-87.
小畑千晴 (2013). デートバイオレンス可能性尺度の作成について　奈良大学大学院研究年報, **18**, 45-52.
岡本亮樹 (2013). デートＤＶに及ぼすジェンダー・ロールとパワー・リレーションの影響　福山大学こころの康相談室紀要, **7**, 9-17.
岡本亮樹・青野篤子 (2014).　デートＤＶに及ぼすジェンダー・ロールとパワー・リレーションの影響ー葛藤解決に注目してー　福山大学こころの康相談室紀要, **8**, 9-17.
小澤美咲・長谷川博亮 (2013). 思春期・青年期におけるデートＤＶに関する意識と実態調査　日本精神科看護学術集会誌, **56**, 311-315.
榊原佐和子. (2011) 大学生のデートバイオレンス被害経験と暴力受容態度・性役割態

度・精神的健康との関連　明治学院大学大学院心理学研究科心理学専攻紀要, **16**, 49-64.
坂巻郁美 (2011). 大学生のドメスティック・バイオレンス及びデートＤＶ認知度について　武蔵野大学大学院言語文化研究科・人間社会研究科研究紀要, **1**, 35-39.
笹竹英穂 (2014). 大学生の心理的デートＤＶの被害経験の実態および被害の認識の性差　学生相談研究, **35**, 56-69.
Smith Slep, A.M. & O'Leary, S.G. (2005). Parent and partner violence in families with young children: Rates, patterns, and connections. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **73**, 435-444.
Straus, J.A. (1979). Measuring intrafamily conflict and violence: The conflict tactics(CT) scales. *Journal of Marriage and the Family,* **41**, 75-88.
Straus, J.A., Hamby, S.L., Boney-McCoy, S., & Sugarman, D.B. (1996). The revised Conflict Tactics Scales(CTS2) : Development and preliminary psychometric data. *Journal of Family Issues*, **17**, 283-316.
Sugihara, Y., Katsurada, E., Sibata, S., & Terui, N. (2003). Dating violence, bullying at school and family-of-origin violence among Japanese college student. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, **25**, 83-87.
鈴木ひとみ・畑下博世・川井八重ほか (2009). 高校生の対人関係形成に影響する要因の検討：デートＤＶの潜在性との関連　滋賀医科大学看護学ジャーナル, **7**(1), 51-56.
武田道子・大西和子 (2012). 高校生のデートＤＶに対する認識および経験の実態　日本看護学会論文集　地域看護, **42**, 151-154.
田村公江・細谷実・川畑智子・田中俊之 (2012). 大学生の性意識調査　龍谷大学国際社会文化研究所紀要, **14**, 259-304.
寺島瞳・宇井美代子・宮前淳子・竹澤みどり・松井めぐみ (2013). 大学生におけるデートＤＶ実態の把握－被害者の対処および別れない理由の検討－　筑波大学心理学研究, **45**, 113-120.
富安俊子・鈴井江三子 (2011). 青年期男女におけるデートバイオレンスの認識と性差間の相違　母性衛生, **51**, 626-632.
富安俊子・鈴井江三子 (2014). 青年期男女におけるデートバイオレンス防止教育モデルの有用性　母性衛生, **54**, 479-485.
植田由紀子・安東由則 (2010). 高校生のデートＤＶに関する実態調査の分析　臨床教育学研究, **16**, 65-86.
上野淳子 (2013). デートＤＶ研究の問題点　四天王寺大学紀要,**57**,195-206
上野淳子・松並知子・青野敦子・赤澤淳子・井ノ崎敦子 (2011). 大学生の性に対する態

度がデートＤＶに及ぼす影響　四天王寺大学紀要, **53**, 111-122.
上杉有加・大島麻美・背戸美希・田根なつみ・藤井公美・鈴木康江・山根美智子・藤田小矢香・池田智子・遠藤友里・南前恵子・笠城典子・前田隆子 (2013). デートＤＶの実態調査：背景因子と健康への影響について　日本医学看護学教育学会誌, **22**, 2-6.
艮香織・小堀尋香 (2013). デートＤＶの現状と課題：大学生を対象とした調査から　宇都.宮大学教育学部紀要　第１部, **63**, 211-219.
Waker, L.E. (1979). *The buttered woman*. New York: Harper & Row.（Waker, L.E. (1997). バタード・ウーマン（斉藤学, 監訳）.東京：金剛出版）.
White, J.W. (2009). A gendered approach to adolescent dating violence: Conceptual and methodological issues. *Psychology of Women Quarterly*, **33**, 1-15.
Wolfe, D.A., Crooks, C.C., Chiodo, D., & Jaffe, P. (2009). Child maltreatment, bullying, gender-based harassment, and adolescent dating violence: Making the connections. *Psychology of Women Quarterly*, **33**, 21-24.
Worth, D. W., Matthews, P. A., & Coleman, W. R. (1990). Sex role, group affiliation, family background, and courtship violence in college students. *Journal of College Student Development*, **31**, 250-254.
山田典子・山田真司 (2010). 高校生の Dating violence の特性と課題　母性衛生, **51**, 311-319.
山口のり子 (2003). デート DV 防止プログラム実施者向けワークブック：相手を尊重する関係をつくるために.東京：梨の木舎.
山下匡将 (2009). 若者におけるデートＤＶの基礎的研究　名古屋学院大学論集　社会科学篇, **46**, 161-178.
吉岡香 (2007). デート DV 被害女性の異性との関係性のあり方について　人間性心理学研究, **25**, 179-191.

Review of studies on dating violence in Japan and their future tasks

Junko Akazawa

This study reviewed studies on dating violence in Japan, summarized their methodologies and results, and discussed their problems. The problems are found concerning: biased research targets, limited comparison with other countries, inconsistency of violence scales, and lack of studies on direction and causal mechanism of dating violence. Considering these problems, future studies on dating violence in Japan should expand the target ages from junior high-school students to young adults, and study mechanisms of the dating violence in relation to other kinds of violence such as child abuse and bulling at school.

Key words: dating violence, domestic studies, review